《論　文》

津波碑は生き続けているか
――宮城県津波碑調査報告

北原　糸子*
卯花　政孝**
大邑　潤三***

要約

東北地方太平洋沖津波はだれもが予想できなかったほどの大津波によって甚大な被害をもたらした。東北地方の太平洋沿岸は近代以降でも 1896 年明治三陸津波、1933 年昭和三陸津波、1960 年チリ津波などに襲われ、これまで何回も津波を経験している地域であった。そのため、津波に対しては村や町で命を守るための努力がなされてきた。その一つに、津波体験を忘れないために、津波記念碑を建てるということが行われてきた。しかし、今回の巨大津波によって、こうした過去の災害文化の記念碑も押し流されてしまったところが多い。過去 3 回の津波は岩手県の被害が大きかったが、今回は震源が宮城県沖の断層も動いたため、宮城県の被害が過去に比べて極めて大きかった。そこで、過去の津波で建てられた津波碑が今回無事かどうかを調べ、浸水域図に今回の津波で壊れた碑、流されて無くなってしまった碑、現在も健在の碑の 3 種類に分けて地図にその位置を示した。

キーワード：東北地方太平洋沖津波、津波碑、津波体験、記念碑、災害文化

はじめに

東日本大震災発生以来、過去の津波碑（1896 年明治三陸津波、1933 年昭和三陸津波）に関する情報がメディアにもしばしば登場した。以前、この地域の津波碑調査などに関わったことがあり[1)]、今回の巨大な津波で碑は流されてしまったのではないかと気になっていた。しかしながら、直ぐには現地に行くことができなかったが、7 月末に岩手県沿岸部の釜石周辺を調査することができたので、簡単な報告をした[2)]。

今回の津波は明治・昭和の過去 2 回の津波とは比較できないほどの大きな被害を岩手県、宮城県、福島県、茨城県、千葉県にまでも及ぼした。いうまでもなく、福島県では福島第一原子力発電所が破壊され、放射能に汚染された地域は福島に限らず、栃木・群馬・千葉・埼玉・東京にも広がった。幅 2km、長さ 500km の長大断層は、複数の震源が連動した結果ということであるから、被害範囲は過去 2 回の場合とは格段に広範囲に及んだ。また、今回の震源位置から、過去被害が大きかった岩手県に比べ、宮城県沿岸部は予想を上回る被害を受けた。そこで、多少の調査漏れがあ

*関西学院災害復興制度研究所研究員
**元東北大学工学部技官
***佛教大学大学院文学研究科日本史学専攻（博士後期課程）

るものの、全体の動向をほぼ把握できたので、以下で宮城県について報告をする。

1　明治・昭和の津波被害と平成の津波

簡単に過去２回の被害の概要と、津波碑がどのように建立されたのかを述べるが、まず、津波碑を建立する根拠となった過去の被害の概略を説明しておきたい。

図１は『宮城県昭和震嘯誌』[3)]に掲載された昭和三陸津波の宮城県の浦々の被害地である。この図で判るように、岩手県に続く宮城県北部は岩手県と同様なリアス海岸であり、こうした地域で被害が大きかった。同書に掲載された明治と昭和の津波高の比較を示す図も掲載されている（図２）。昭和の津波で被害の出た町村の死者数を基準に明治三陸津波の場合の被害を比較すると、表１のようになる。桃生郡十五浜と牡鹿郡大原村を例外とすれば、各町村とも明治の津波の死者が断然多い。

なお、表１は昭和８年の被害町村に対する比較であるから、明治三陸の場合は、ここに計上していない町村の死者数を含めると、宮城県明治三陸津波の死者数は 3387 人となる（『宮城県海嘯誌』[4)]）。ただし、同書によっても、同じ町村でも死者数に異動があるが、恐らく行方不明者数の扱い方で数値に異動がでたものと推定される。

表１　死者の出た町村（昭和／明治）

郡	町村	昭和８年	明治 29 年
桃生郡	十五浜村	69	58
牡鹿郡	女川町	1	1
牡鹿郡	大原村	62	1
牡鹿郡	鮎川村	1	−
本吉郡	志津川町	−	371
本吉郡	戸倉村	1	64
本吉郡	十三浜村	13	211
本吉郡	歌津村	86	799
本吉郡	小泉村	15	219
本吉郡	階上村	1	437
本吉郡	鹿折村	4	6
本吉郡	唐桑村	60	836
本吉郡	大島村	2	61
計		315	3064

表１の被害の大きい町村を図２と照合すると、昭和と明治の津波は震源域も津波の性質も異なっていたことが推定される。

さて、本論は、津波被害についての全般的な問題を取り扱うことは予定していない。ここに挙げた図や表は、あくまでも津波被害はリアス海岸の場合には湾口の位置や地形などによって被害が大きく左右されることを理解するためである。

図１　昭和三陸津波の宮城県の浦々の被害地図

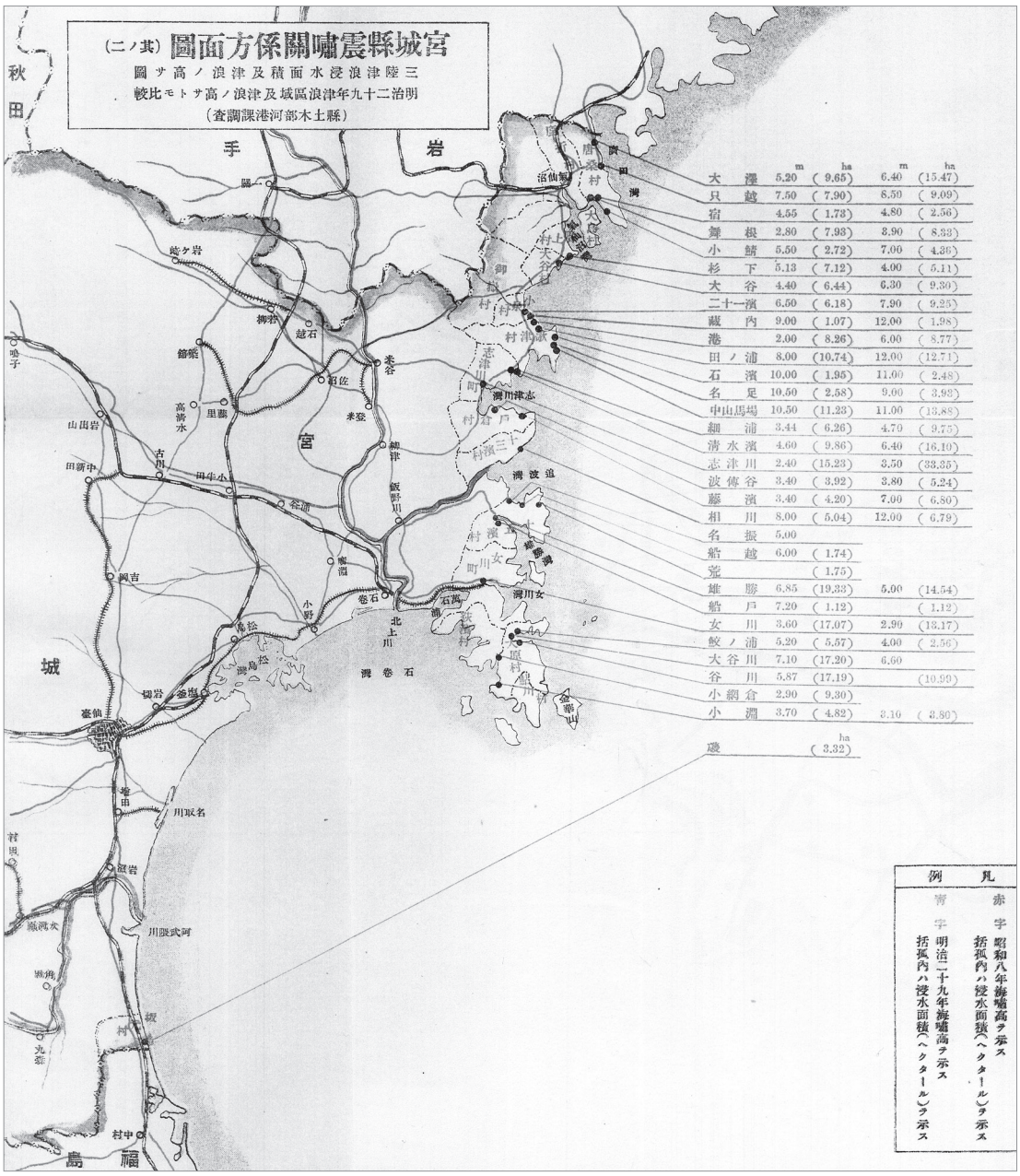


図２　明治と昭和の津波高の比較図

2　津波碑の分布

青森、岩手、宮城の津波碑の分布状況は、明治三陸津波で124基（岩手114基、宮城10基）、昭和三陸津波で150基（青森7基、岩手84基、宮城66基）、明治と昭和の被害を一つの碑に刻したものが岩手県12基、これに1960年のチリ津波碑（岩手7基、宮城5基）が加わる。[5] 多少調査落ちの可能性もあるが、ほぼ網羅した数値と捉えていただきたい。チリ津波碑は防災を兼ねて道路上に津波遡上地点を刻するものなど、形態も異なるので、以下では明治と昭和の記念碑・供養碑を中心にみていくことにしたい。

さて、以上に掲げた数値から、明治の場合は岩手県が圧倒的に多いが、昭和では、岩手県、宮城県の津波碑の数がやや拮抗してくることがわかる。実際の被害（死者数）をみると、表２のようになる。

表２　明治・昭和三陸津波の死者数

県	明治	昭和
青森	343	30
岩手	18,158	2,658
宮城	3,387	307
計	21,888	2,995

出典：山下文男『哀史三陸津波』青磁社、1982 年

この数字から、昭和の場合には全体で死者数が明治の場合の 14％程度に減少し、また、宮城県の津波死者が 10 分の１以下になったにも拘わらず、津波碑が圧倒的に増える結果になっていることがわかる。これには、被害の大小ではない要件がかかわっていたことを推測させる結果である。

はたして、これらの津波碑は、朝日新聞社が募集した義捐金 20 万円のうち、救済費に当てた残りを津波碑を設けるよう指定された結果であったのである。今、その経過を『宮城県昭和震嘯誌』によってみておくことにしたい。

3　津波碑建立の義捐金

東京・大阪朝日両社は昭和三陸津波が発生した３月３日の翌日から、紙面を通じて「救援同情義金」を募った。１口１円以上とし、５月末までに 21 万 2997 円余が集まった。こうした災害の際の義捐金募集はすでに 1885 年の大阪洪水以来新聞社の事業として定着していたから、朝日に限らず、東京日日、大坂毎日、報知、読売、時事新報社など、中央紙の各社、東北に限らず、中国・四国の地方各紙が競って募金活動を展開した。しかし、朝日新聞社が特異であったのは、21 万円余の義捐金のうち 16 万円余の救済費の残り５万円余を「災害記念碑」の建設資金に指定し、被害３県に配分したことであった。宮城県には１万 3115 円が配分され、県は被災した 63 ケ町村に津波碑の建立を指示した。１基 208 円 17 銭、記念碑の大きさを「高サ五尺、幅二尺五寸以上（台石ヲ含マス）」と、「被害状況及津浪ノ来襲セル地域等後世ノ参考トナルヘキ記録ヲ表示スルコト」としたのである。

また、参考として、「地震があったら津浪の用心」という標語案が掲げられ、また、碑の裏面には「此の記念碑は朝日新聞社へ寄託の義金二十余万円を罹災町村へ分配した残額をもって建てたものです」という文面を記すことも条件とされた。その結果、宮城県は明治の津波では、供養碑を建立する例は少なかったものの、昭和津波の場合には一挙に建立例が増えたのである。

その際に指定された 63 部落として挙げられた村・部落名について、東日本大震災後の津波碑の状況調査の付表１～４の備考欄に挙げておく。これが現在の津波碑の存廃を判断する根拠ともなるからである。今回調査した碑の流失・倒壊・健在の有無を表３にまとめた。

表３　宮城県津波碑残存状況調査

表番号	流失	倒壊	健在	未確認	計
付表１		4	11		14
付表２	7	5	4		16
付表３	9	9	12	4	34
付表４	2	1			3
計	18	19	27	4	67

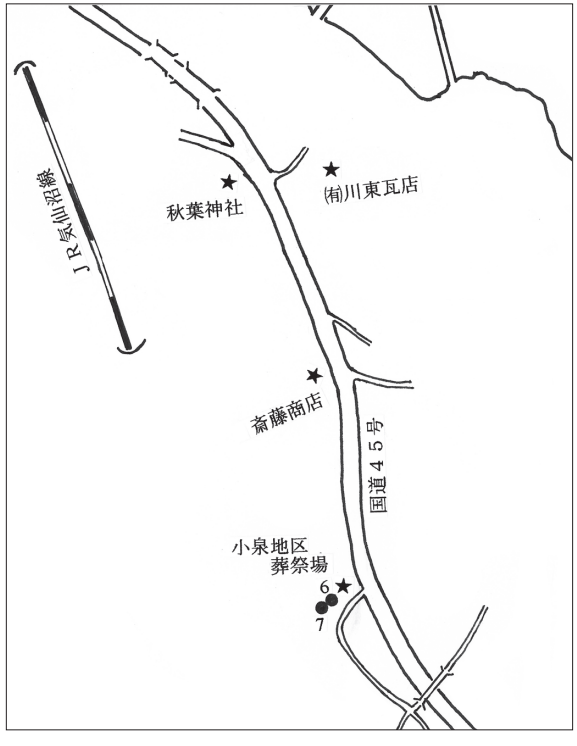
今回調査した津波碑の地点を浸水域との関係が把握できるように、原口強氏による『東日本大震災津波詳細地図』上巻（青森・岩手・宮城）の地図上に番号で示し、当該番号の津波前と津浪後の碑あるいは付近の状態を撮影した写真をセットにして地図を添える（付表１～４；付図１～5）。付表の no. と付図上の番号は対応させてある。本図は大邑潤三の作成に掛かるものであり、使用した基図、その他についての解説を注に付した[6]。これらの付表と付図によって、浸水域と津波碑の残存情況が一目で把握できるはずである。今回の津波被害が地域の文化財として 100 年以上前から存在

していたものを破壊し去ったことがわかる。

津波前の写真は基本的には卯花政孝が20年以前から撮影して来たものである。[7] 写真の状態が悪い1部のものは「津波デジタルライブラリー」（http://tsunami.dbms.cs.gunma-u.ac.jp/）に掲載されたものをダウンロードさせていただいた。参考までに宮城県では数少ない明治津波の供養碑と昭和の朝日新聞指定の津波への警句を刻した碑の事例をいくつか挙げておく（図3, 4, 5, 6参照）。

注

1）　北原糸子「東北三県における津波碑」『津波工学研究報告』18号、2001年。
2）　北原糸子「蘇らせよう、津波碑の教訓」『建築雑誌』11月号、2011年。
3）　宮城県、1935年。
4）　宮城県、1903年。
5）　注1参照。
6）　宮城県の津波碑図の解説（大邑潤三）。
津波碑の位置については、卯花政孝の被災前調査データを参考にして場所を特定し、各石碑の位置データを作成した。また津波浸水域のデータは大阪市立大学大学院 原口強氏がWeb（東日本大震災津波現地踏査報告　http://www.jsgi-map.org/tsunami/earth.html）にて公開しているkmzファイルをダウンロードしてshpファイルに変換した。これらの各データを地理情報分析支援システムMANDARA（Version 9.35）にて展開し、背景に国土地理院の電子国土Webシステムから提供された地図を配した。津波碑には北から1～67番まで通し番号を振り、被災後の津波碑の状態を流失＝赤、倒壊＝黄、健在＝緑と分類してそれぞれ色分けした。こうして作成した図に卯花政孝撮影の被災前写真（左）と被災後写真（右）を並べて表示し、石碑番号と対応する番号を付した。
7）　卯花政孝「三陸沿岸の津波石碑――その1・釜石地区」『津波工学研究報告』8号、東北大学工学部災害制御センター、1991年；「三陸沿岸の津波石碑――その2・三陸地区、その3大船渡地区、その4・陸前高田地区」『津波工学研究報告』9号、東北大学工学部災害制御センター、1992年など。



本吉 6–7　宮城県本吉郡本吉町二十一浜　小泉地区葬祭場

（縦 156cm・横 84cm・厚さ 30cm）

図３　本吉６

昭和三年三月一日

大震災記念碑

地震があったら津浪の用心

午前二時三十分大地震後約二十分にして三陸沿岸一帯に津浪襲来せり本村にては廿一濱藏内濱に多大の損害を與へられ死者十五名流失二十二戸浸水十四戸其他損害額九万九千余圓に及べり

（右側面）

此の記念碑は朝日新聞社へ寄託の義金二十余万圓を罹災町村へ分配した殘額を以て建てたものです

昭和九年三月一日

小泉村青年團

石工小野寺一朗

及川菊之助

（縦 133cm・横 78cm・厚さ 30cm）

図４　本吉７

海嘯溺死者精霊之塔

維時明治廿九年六月十五日即陰五月五日午後八時餘俄然接大海嘯之

月五日午後八時餘俄然接大海嘯之

奮起而三陸被其害者擧不可計焉而

本濱一帯被其害殊多矣將為其

海嘯濱高山腹五丈陸地

長溺死者百餘間四十九人負傷者五十四

三五二十一酸烈激浪而流失戸數者三

名須臾忽見如是慘状矣是未曾聞所

也當此時官賜之金食林材人贈之金

是衣器具以纔到令其存者不絶家系於

乎其継之者追吊死者爰以建碑焉

世話人小野寺榮治郎

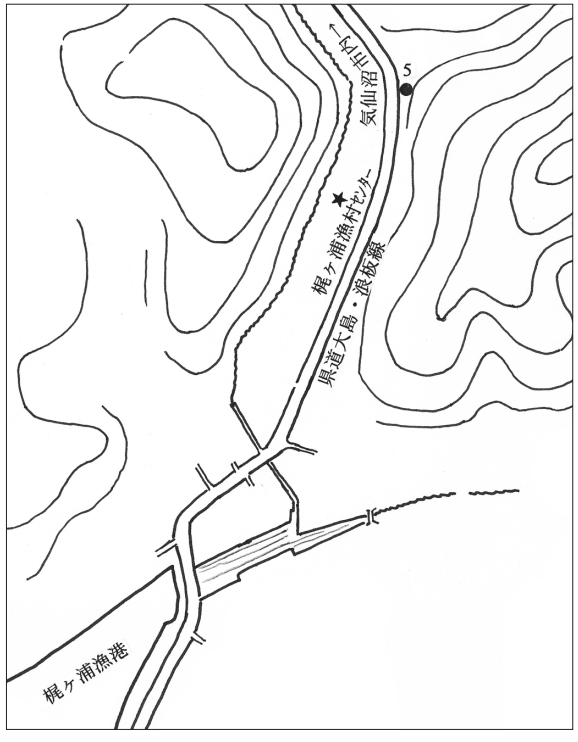
同　及川丑松

二十一　契約中

明治廿年陰五月五日

今朝磯

六郷弘道書



気仙沼５　宮城県気仙沼梶ケ浦（二ノ浜）漁村センター付近

（縦 221cm・横 93cm・厚さ 24cm）

図５　気仙沼５

大地震それ来るぞ大津浪

大震嘯災記念

昭和三年八月三日

正六位勲六等四竈仁邇書印印

（碑面裏）

大震嘯災概況

昭和八年三月三日午前二時三十二分ヨリ二分間余ニ亙ル大地震起ル夫ヨリ約十五分後気仙郡沖合方面遙ノ海底ニ大小ノ爆音二回聞コユ後約二十分ニシテ大津浪来ル其ノ被害区域本縣ヨリ北海道ニ及フ

一、本村ノ被害右ノ如シ

鶴ケ浦湊　死者　男二女二　傷者　男三女一

一、家屋流失　一戸　半潰　二戸

一、床上浸水　六棟

一、床下浸水　六棟

損害総額　漁船及漁具　三万四千余円　耕地損害多シ

一、津浪ノ高サ三〜三メートル以北浜地区迄一メートルヨリ一、三メートル

一、鶴ケ浦湊ヲ甫メ各地ヨリ寄贈セラレタル金品左ノ如シ

金員五千八百四十四円　物品二千百六十点

畏クモ両陛下ヨリ御救恤金更ニ皇后陛下ヨリ重傷者ニ衣服地並ニ裁縫料各宮殿下ヨリ御救恤金ヲ御下賜アラセラル御仁慈恐懼感激ニ禁ヘス

此ノ記念碑ハ東京朝日新聞社ヘ寄託ノ義捐金二十余万円ヲ罹災町村ヘ分配シタル殘額ヲ以テ建立シタルモノナリ

石工　菅野伊三郎　薫風謹書

（碑面裏）

此の記念碑は朝日新聞社寄託の義金二十餘萬圓を
一羅災町村の分配した殘額をもって建てたものです

大澤災害状況

馬	無	動	住	住	溺	死
	動	力	宅	宅	死	者
	力	漁	浸	全	者	五名
斃	漁	船	水	潰		四戸
	船	流				十戸
	流	失				十
死	失	破				二艘
	破	損				二艘
	損					二艘

唐桑村

四十

日三月三年八和昭
大震嘯災記念

地震があったら
津浪の用心

正六位勲六等四竈仁邇書
陸前井内阿部勇之丞刻

（縦 206cm・横 90cm・厚さ 18cm

図６　唐桑１

唐桑１　宮城県本吉郡唐桑町字港　加茂神社

付表１　（図１に対応）　宮城県津波碑調査（2012/03/11～13）

no.	碑番号	場所	存否	県指定	メモ
1	唐１・S	本吉郡川唐桑町字港（旧大沢村）賀茂神社	倒壊、割れ部分本体から外れてあり	○	3月13日調査、国道45号線工事（昭和40年代）以前は港部分にあったが、工事後は神社境内にあり。今回津波で崖崩落とともに倒壊、既に碑の上部は割れ、鉄で固めていたが、今回は外れ飛ぶ。（流出140戸、死者36人）
2	唐２・S	本吉郡川唐桑町字只越	山際に健在	○	付近家屋総て流出
3	唐３・S	本吉郡川唐桑町字石浜	路肩の上に健在	○	民宿なぎさの看板近く
4	唐４・S	本吉郡川唐桑町字御崎	ビジターセンター内	○	昭和59年宿から移転
5	唐５・S	本吉郡川唐桑町字小鯖	健在	○	
6	唐６・S	本吉郡川唐桑町字鯖立（しびだて）	八幡神社階段脇にあり、台座多少損ず	○	鯖立港、地盤80cm以上下がる、仮の護岸設置、3月12日死者の清め（浦祓い執行；神主2人、村人約20人集まり、海に向かい祓いの行事（全壊戸74、死者17人）
7	唐７・S	本吉郡川唐桑町字宿浦	早馬神社参道にあり	○	5年前に現地に移転、流出免れる、宿浦全壊戸200
8	唐８・S	本吉郡川唐桑町字舞根	健在	○	港より高い地点の杉の蔭にあり
9	気４・S	気仙沼市鶴ケ浦	御嶽神社階段脇		鶴ケ浦港、家屋流出甚だし
10	気５・S	気仙沼市梶ケ浦（二ノ浜）	道路脇に健在	○	気仙と梶ケ浦漁港の両方から津波が襲来；（旧鹿折）
11	気６・S	気仙沼市小々汐	倒壊、根元から折れて裏返しとなり、防波堤横にあり	○	漁港の家屋総て流出
12	気７・S	気仙沼市大浦	県道沿い、海岸線沈下、台座とも倒壊してあり	○	この付近地盤沈下激し
13	気８・S	気仙沼市浪板	道路拡張され、道路肩の上、小野寺宅の裏にあり	○	
14	気９・S	気仙沼市東みなと町鹿折川万行沢橋付近	倒壊、裏返しとなる	○	横の碑は健在、気仙沼市内、付近の市街地はすべて津波襲来、被害大；（旧浜区）

碑番号の付されたS（昭和津波碑）、M（明治津波碑）を示す。大島（長崎・駒形・磯草）の3基は未調査。

付表２　図２に対応　３月24日～26日調査

no.	碑番号 M/S	場所・碑	県指定	周囲の状況	被害	メモ
15	気仙沼 10・M	宮城県気仙沼市波路上地福禅寺		流失、行方不明	地福禅寺庫裏も屋根まで津波、碑は行方不明	付近高洋高校も３階まで津波遡上、高校生は地福禅寺へ避難、そこから更に年寄などを負ぶって逃げた
16	気仙沼 11・M	宮城県気仙沼市波路上地福禅寺		流失、行方不明	地福禅寺庫裏も屋根まで津波、碑は行方不明	付近高洋高校も４階まで津波遡上、高校生は地福禅寺へ避難、そこから更に年寄などを負ぶって逃げた
17	気仙沼 12・S	宮城県気仙沼市波路上字崎野		流失、行方不明	海の殉難者慰霊塔付近の防潮堤の脇に一面の墓地はすべて倒壊、無残、墓石めくれ、納骨所も浮き上がる状態	
18	本吉 1・M	宮城県本吉郡本吉町大谷漁港		流失、台座のみ残る		瓦礫として処分
19	本吉 2・S	宮城県本吉郡本吉町大谷漁港	○	流失、台座のみ残る		瓦礫として処分
20	本吉 3・M	宮城県本吉郡本吉町大森　清涼院		少々傾く	清涼院階段下にあり	
21	本吉 4・M	宮城県本吉郡本吉町圃の沢　浄福寺		健在	浄福寺境内にあり	墓石倒壊甚大、地福禅寺坂途中に津波浸水の印あり
22	本吉 5・M	宮城県本吉郡本吉町小泉		総て流失	小泉の喪失度合甚だし、なにも残らず、	碑の痕跡もすべて流失
23	本吉 6・S	宮城県本吉郡本吉町二十一浜	○	健在	建物の背後、他の碑と並立に建て直したと推定	
24	本吉 7・M	宮城県本吉郡本吉町二十一浜		健在		
25	歌津 1・S	宮城県本吉郡歌津町港	○	倒壊、あり	地盤沈下、浸水状況のまま、土嚢で堤防	
26	歌津 2・S	宮城県本吉郡歌津町田ノ浦旭岡八幡神社階段脇	○	健在	八幡神社鳥居は倒壊、砕けてあり、神社は高所にあり、コンクリート階段ひび割れ	家屋ほとんど流失
27	歌津 3・S	宮城県本吉郡歌津町石浜	○	倒壊、林の中	道路付け替えで崖の上となり、近寄れず	
28	歌津 4・S	宮城県本吉郡歌津町名足	○	倒壊、板の上に裏返し	コミュニティーセンターは流失、土台のみ	
29	歌津 5・M	宮城県本吉郡歌津町馬場		倒壊、その場にあり	五十鈴神社の鳥居は倒壊	
30	歌津 6・S	宮城県本吉郡歌津町伊里前向	○	なし、流失・不明	伊里前川にウタちゃん橋のたもとにあり、忠魂碑などは倒壊して残る	小学校庭に40cm浸水、小学生は上の中学校に逃げた。上下伊里前で32名死亡、うち13名不明

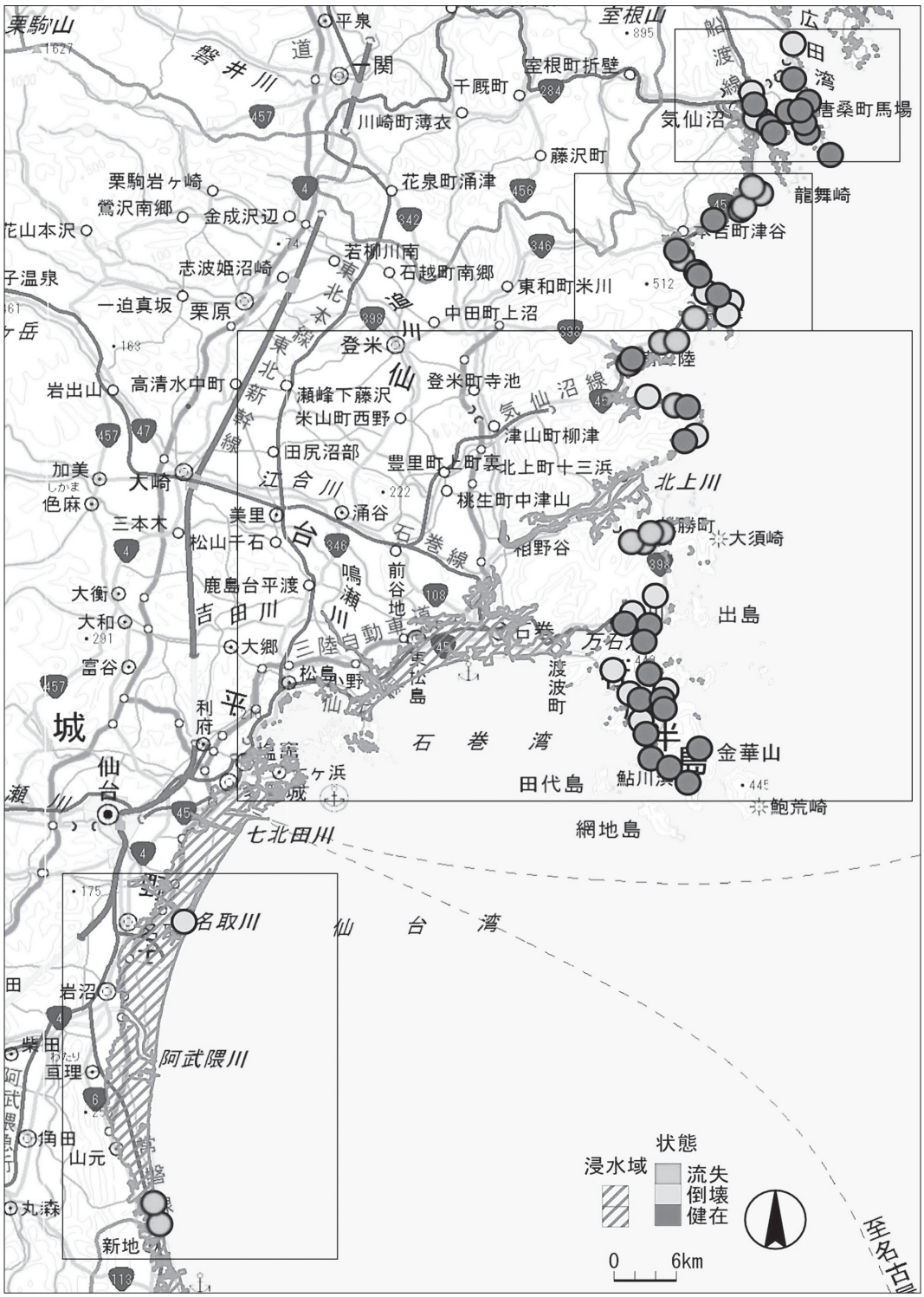
付表 3（図 3・図 4 に対応）2012 年 1 月 25 日～ 27 日調査

no.	碑番号	場所	県指定	碑の状態	
31	志津川 1・S	南三陸町細浦	○	流失、不明	
32	志津川 2・S	南三陸町清水	○	現場になし	
33	志津川 3・M	南三陸町海円寺境内（市立公園）		29 年の津波に追善供養碑	図 4 参照
34	志津川 4・チリ	南三陸町松原公園④		すべて瓦礫置き場となり、不明	図 4 参照
35	志津川 5・S	南三陸町松原公園④	○	すべて瓦礫置き場となり、不明	図 4 参照
36	志津川 6・チリ	南三陸町松原公園④		すべて瓦礫置き場となり、不明	図 4 参照
37	志津川 7・チリ	南三陸町松原公園④		すべて瓦礫置き場となり、不明	図 4 参照
38	志津川 8・S	南三陸町 波伝谷（はでんや）	○	海岸に倒れて、浪に打たれていた、残存	
39	志津川 9・S	南三陸町標石碑		流されてナシ	
40	志津川 10・S	南三陸町長清水	○	健在、山蔭にあり	
41	北上 1・S	南三陸町大指（おおさし）	○	倒れて残存	
42	北上 2・S	南三陸町小指（こさし）	○	神社階段脇に残存、但し、神社は流失	
43	雄勝 1	上雄勝町 2 丁目		未調査につき除外	
44	雄勝 2・S	雄勝町伊勢畑		未調査につき除外	
45	雄勝 3・チリ	雄勝町伊勢畑		未調査につき除外	
46	雄勝 12	上雄勝町 2 丁目		未調査につき除外	
47	女川 1・S	女川町御前浜	旧地名不明	以前に半分に割れてあり、針金で縛る、今回倒壊、現場に割れた状態	
48	女川 3・S	女川町崎山展望公園	旧地名不明	健在	
49	女川 4・S	女川町旧女川役場敷地内	旧地名不明	倒壊、現場に残る	女川町役場すべて津波被る、敷地内の津波碑横の町長銅像は倒壊
50	女川 5・S	女川町熊野神社階段下	旧地名不明	健在	女川町中心部すべて破壊、山の麓のため残る
51	女川 6・S	女川町高城（白）浜	○	健在	この碑のみフロックに囲まれて残る
52	女川 7・S	女川町野の浜	○	健在	
53	牡鹿 1・S	石巻市牡鹿鮫浦細田・熊野神社階段下	○	倒壊、片付け（他の碑と一緒）	
54	牡鹿 2・S	石巻市牡鹿谷川浜清水	○	健在	道路沿い

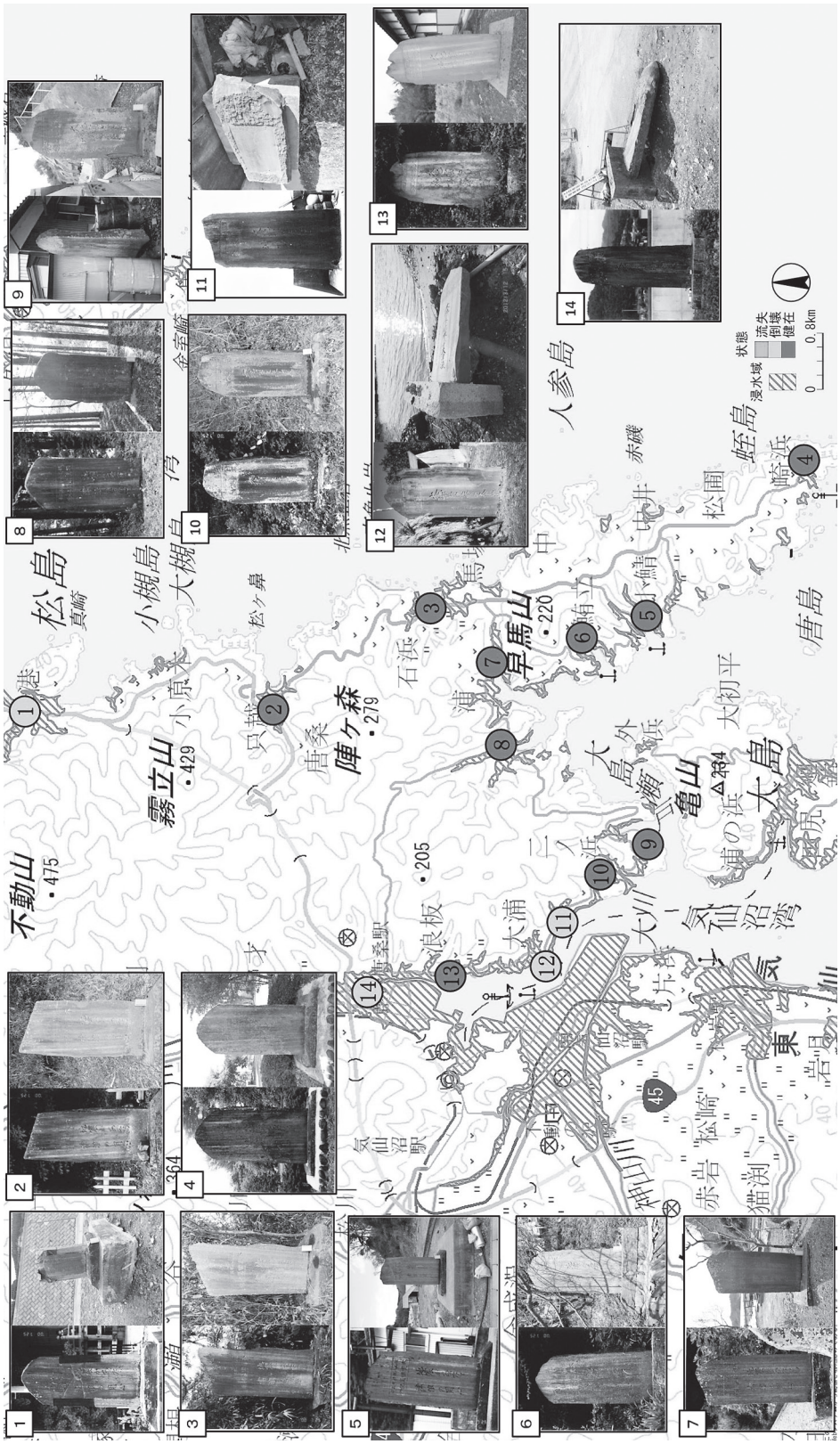
no.	碑番号	場所	県指定	碑の状態	
55	牡鹿３・S	石巻市牡鹿谷川小学校下、	○	移動して建て直し、存在	谷川小学校は２方向からの波襲来を受け、教室内に砂、清水浜は谷の奥まで津波襲来、砂門が畑に残る
56	牡鹿４・S	石巻市牡鹿新山浜		アリ	
57	牡鹿町６・S	石巻市牡鹿鮎川浜	○	アリ	国民健康保険病院は鮎川集会所になっていた；鮎川漁港被害大、クジラ博物館概観保つ
58	牡鹿７・S	石巻市 牡鹿十八成（くうなり）		アリ	
59	牡鹿８・S	石巻市牡鹿小淵浜	○	アリ	五十鈴神社階段下
60	牡鹿９・S	石巻市牡鹿小網倉浜	○	倒れそうだが、存在	
61	牡鹿10・S	石巻市牡鹿小網倉浜	○	流れて、アリ	流れ、道の反対側に移動；小網倉分館流出、ナシ
62	石巻1·S	石巻市小積浜	○	アリ	
63	石巻2·S	石巻市荻浜	○	倒壊、アリ	26日戻り、確認済み
64	石巻3·S	石巻市桃浦	○	移動、倒壊、アリ	

付表４（図５に対応）

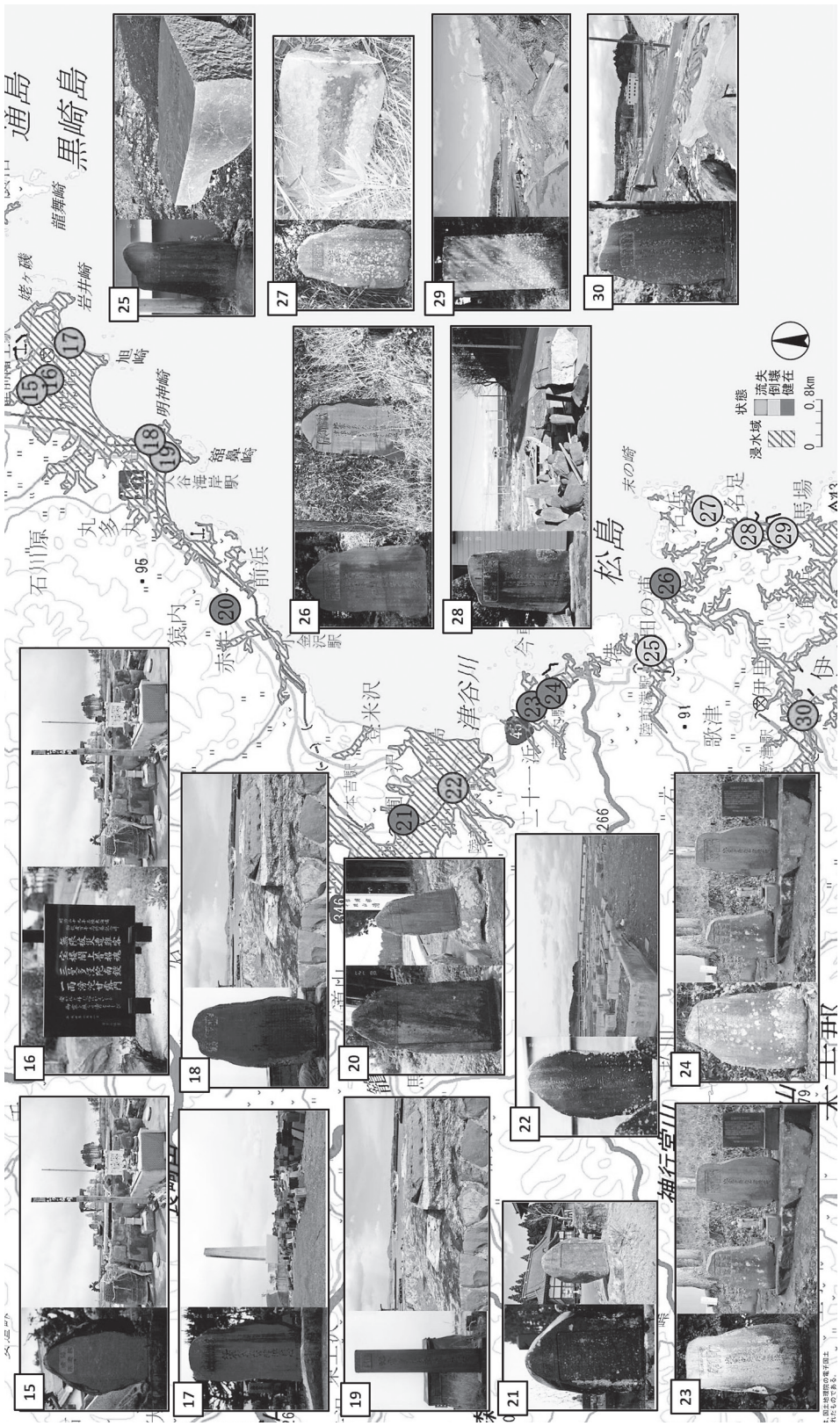
no.	碑番号	場所	県指定	碑の有無	周囲の状況
65	名取１・S	名取市日和山	○	倒壊、アリ	日和山の麓にあり
66	山元１・S	亘理郡山元町坂元、津之神社	○	流失	坂元小学校も津波が校舎内を抜けた
67	山元２・S	亘理郡山元町磯浜漁港	○	流失	漁港破壊、総て流失


栗駒山
磐井川
平泉
一関
室根山
広田湾
唐桑町馬場
気仙沼
室根町折壁
千厩町
川崎町薄衣
藤沢町
栗駒岩ヶ崎
鶯沢南郷
金成沢辺
花泉町涌津
龍舞崎
花山本沢
若柳川南
石越町南郷
志波姫沼崎
東和町米川
一迫真坂
栗原
中田町上沼
登米
仙台
高清水中町
瀬峰下藤沢
登米町寺池
岩出山
米山町西野
津山町柳津
田尻沼部
加美
色麻
大崎
豊里町上町裏
北上町十三浜
北上川
桃生町中津山
三本木
美里
涌谷
松山千石
相野谷
大須崎
鹿島台平渡
前谷地
大衡
大和
吉田川
鳴瀬川
出島
大郷
石巻
富谷
松島
渡波町
利府
塩竈
石巻湾
金華山
城
仙台
七ヶ浜
田代島
鮑荒崎
網地島
七北田川
名取川
仙台湾
岩沼
阿武隈川
亘理
角田
山元
丸森
新地
状態
浸水域
流失
倒壊
健在
0
6km
至名古屋

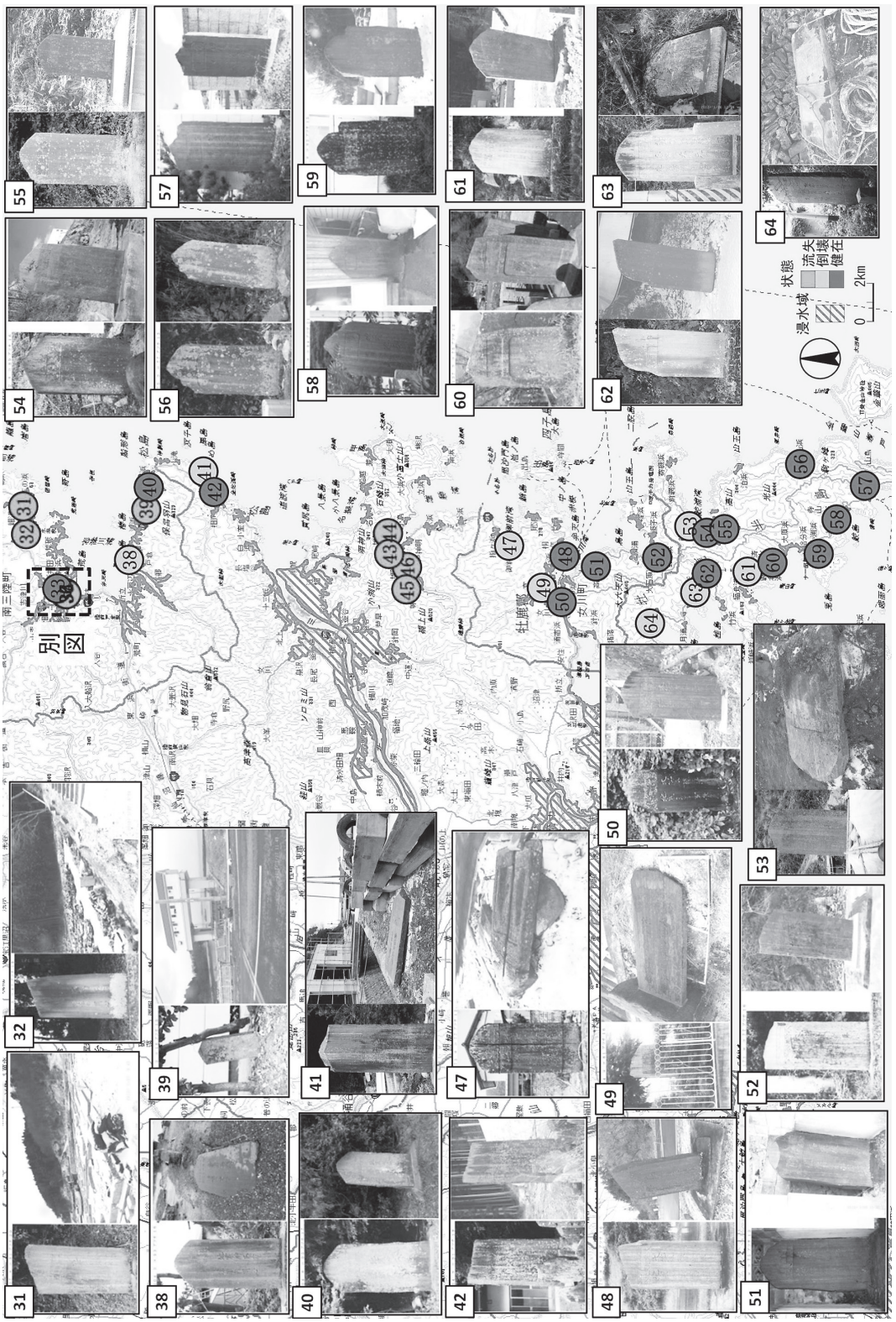
津波碑所在全図（宮城県）


不動山
・475
霧立山
・429
陣ケ森
・279
早馬山
・226
竜山
△234
・205
松島
真崎
小槻島
大槻島
人参島
唐島
唐桑駅
気仙沼駅
浪板
大浦
石浜
赤碑
松圃
崎浜
姪島
大初平
浦の浜
大島
気仙沼湾
状態
流失
倒壊
健在
浸水域
0
0.8km

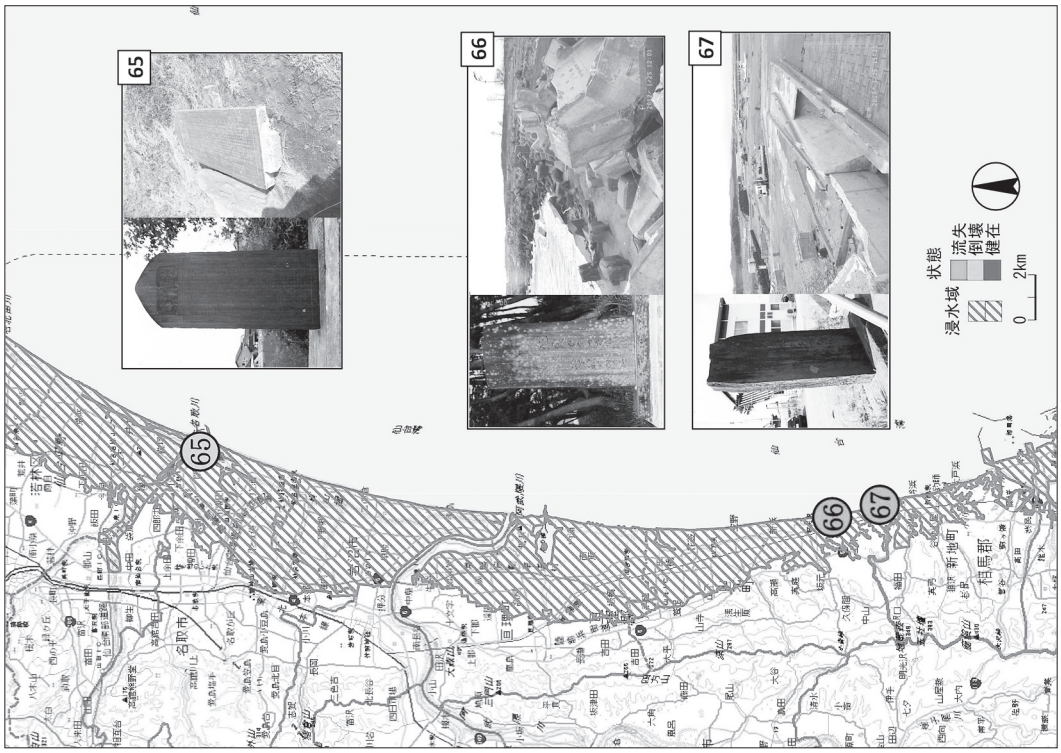
付図１


通島
黒崎島
龍舞崎
姥ヶ磯
岩井崎
旭崎
明神崎
鎧崎
谷港岸駅
丸多丸
石川原
猿内
赤崎
前浜
金沢駅
本吉駅
登米沢
津谷川
十一浜
今
松島
末の崎
名足
馬場
歌津
伊里川
伊
神行宮川
水土那
状態
流失
倒壊
健在
浸水域
0
0.8km
95
91
266
346
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

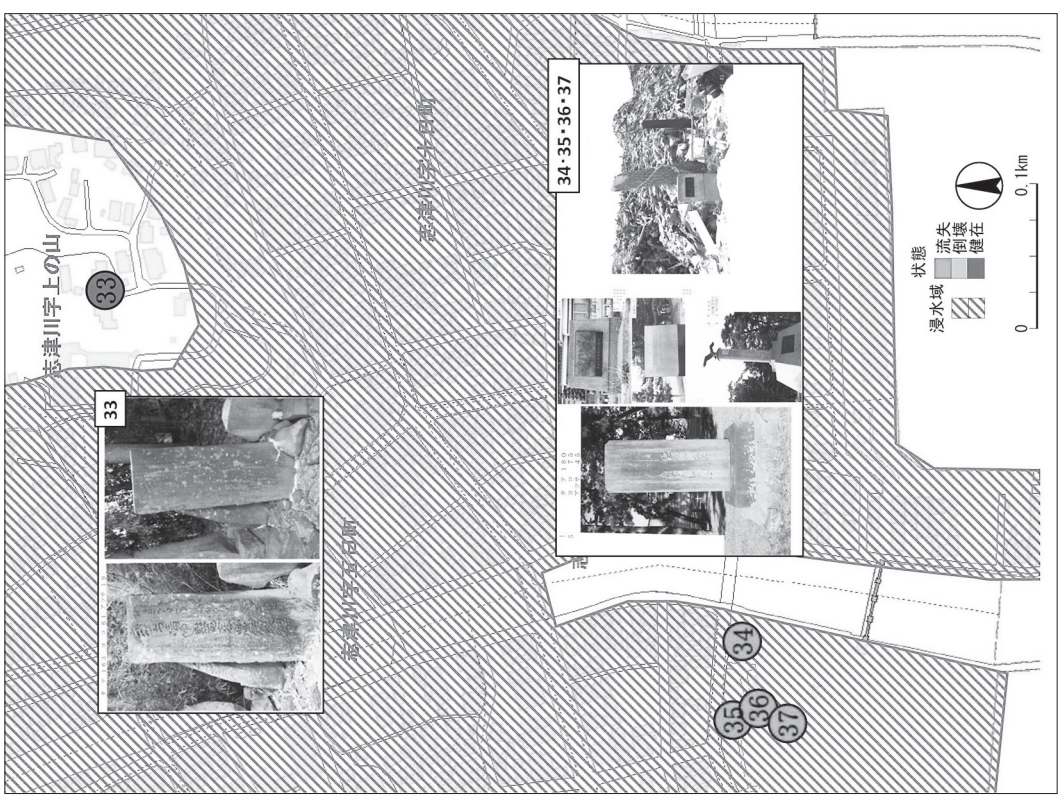
付図 2



付図３


65
66
67
状態
流失
倒壊
健在
浸水域
0
2km

付図 5


志津川字上の山
33
志津川字五日町
34・35・36・37
34
35
36
37
状態
流失
倒壊
健在
浸水域
0
0.1km

付図 4

The Rediscovery of Tsunami Monuments: A Survey and Study of Tsunami Monuments Preserved in Miyagi Prefecture

Itoko KITAHARA
Masataka UHANA
Junzo OHMURA

Abstract

The tsunami that struck the Pacific shore of the Tohoku region (Tohoku-Pacific coast tsunami) in March 2011 was higher and more destructive than anyone predicted, killing more than 20,000 people and washing away thousands of homes and businesses. The Pacific coast of East Japan has been assaulted by major tsunami numerous times, including the Meiji Sanriku Tsunami of 1896, the Showa Sanriku Tsunami of 1933, and the radiating waves of the Chile Tsunami of 1960. The people of the affected areas have long fostered a disaster-prevention culture in their towns and villages to protect themselves against the damage of tsunami. Among these activities has been the erection of monuments to record the experience of the disaster so that people will not forget the tragedy that tsunami bring. We first studied these tsunami monuments more than 15 years ago. This study reports on our investigation of the condition of 67 monuments in Miyagi prefecture, determining which were damaged, which survived, and which were washed away by the 2011 tsunami. The damage of previous tsunami was worst in Iwate prefecture, but that of the 2011 tsunami hit hardest in Miyagi prefecture as the epicenter was located further to the south. We recorded the results of our survey conducted in three stages from December 2011 to March 2012 with photographs and by plotting on an inundation map of the region.

Key words: Tohoku-Pacific coast tsunami, tsunami monuments, tsunami experience, monuments, disaster-prevention culture